

いじめと人権

富岡東高等学校 一年 佐々木 律

(敬称略)

人は誰もが「幸せに生きる権利」を持っている。それは大人でも子どもでも、国籍や性別が違っていても同じだ。しかし学校生活の中では、その権利が簡単に踏みにじられてしまうことがある。それが「いじめ」だ。ユースや本の中だけの出来事ではなく、私たちのすぐ近くでも起こり得る。そして私も、その当事者だった。

中学生の頃、私はいじめを受けたことがある。直接的な暴力ではなく、無視をされたり、陰口を言われたり、仲間外れにされたりすることもあった。教室でひとりぼっちで過ごす時間はとても長く感じられたし、話しかけられても笑ってごまかすことしかできなかった。本当は「やめてほしい」と言いたかったのに、言えばさらに嫌われてしまうのではないかという不安があつて、何も言えなかった。そのとき一番辛かったのは、自分まで仲間外れにされたらどうしようと思つて、誰も助けてくれなかったことだ。私は自分の存在が無視されていると強く感じ、心の中で自分の大切さが失われていくような気がした。いじめは一見、「遊び」や「からかい」に見えることもあるかもしれない。しかし受けている本人にとっては、心を深く傷つける暴力でしかなかった。人は誰でも「自分らしく生きる権利」を持つているのに、いじめはその権利を奪ってしまう。笑顔で学校に通う自由、安心して友達と話す自由、自分の居場所を感じられること。いじめがあるとこれらを失い、人として大事なものが壊れていく。

では、どうしていじめはなくならないのだろうか。私は、「周囲の沈黙」が大きな理由だと思う。実際にいじめをする人の数より、それを黙って見ている人の数の方が多いからだ。その沈黙こそが、いじめを続けさせてしまう。誰かが「それはおかしい」と言うことで、他の人達もそれに賛同して、いじめが終わる可能性があり、救われる人達が増えると思う。だからこそ今の私は、もし自分の周りで同じようなことが起きたら、絶対に見て見ぬふりはしないと強く思っている。また、いじめをなくすためには、普段から互いを認め合う雰囲気を作ることが必要だと思う。人は誰でも長所と短所を持っているし、考え方や好きなものも違う。それを「変だから」と排除するのではなく、「違うから面白い」と受け止めることができれば、いじめは起きにくくなるはずだ。

私は自分の経験を通して、相手を尊重する言葉や態度の大切さを学んだ。あの頃の私は勇気を持たず、つらさを一人で抱えていた。しかしその経験があったからこそ、次に同じような場面に出会ったら、誰かを守れる人になりたいと思えるようになった。人権という言葉は大きく聞こえるけれど、実際は目の前にいる人を大切にするための積み重ねだと思う。小さな勇気や思いやりが、一人の心を守り、未来を守ることにつながるのだ。いじめは人の心を深く傷つける行為であり、人権を奪う重大な問題だ。私たち一人一人が「おかしい」と思ったなら、声をあげること。そして普段の生活の中で、互いを認め合い、支え合うこと。その積み重ねが、誰もが安心して通うことのできる学校につながるはずだ。

さらに言えば、いじめをなくすのは、学校だけの役割ではなく、社会全体の課題だと思う。大人の世界にも形を変えたいじめや差別はあるし、その姿を子どもは自然と見てしまう。だからこそ、大人が互いを尊重する姿を見せることが、次の世代へつながる大きな教育になるのではないだろうか。

私はいじめを経験したからこそ、いじめのない未来を本気で願う。社会全体が「違いを受け入れる心」を大事にすることで、子どもたちの教室からもいじめは減っていくはずだ。私もその一員として、これからも身近な人を大切にして、人権を守る行動を続けたい。そして一人一人の意識が変わることで、いじめのない未来に近づけると信じている。さらに私は自分の経験を語ることで、同じように苦しんでいる人に、「一人じゃない」と伝えたい。声を上げることは勇気がいるけれど、その一歩が未来を変える力になる。だから私はこれからも人権を守る小さな行動を積み重ね、誰もが安心して笑顔で生きられる社会をつくっていききたい。人権を守るために自分のできる行動を続けていき、みんなといじめも差別もなく、平和に楽しく生きられる世界を実現したいと思う。